

## 慢性肝炎から肝硬変進展率評価指標の作成と評価

分担研究者：金子 俊 所属先 武蔵野赤十字病院 消化器科

研究要旨：肝硬変への進展を判定することは、肝発癌性および患者予後を推定し、肝炎政策立案推進の面から重要である。以前の研究で我々は、世界的に用いられている線維化判定式 APRI および FIB-4 の肝硬変進展度判定に関する有用性について、班参加施設および研究賛同施設の多数症例を用いて検討を行った。B 型肝炎症例、C 型肝炎症例いずれでも肝生検組織とは相関性はよかった。①2 回肝生検症例の生検間隔期間、②肝生検で肝硬変と診断された症例の後ろ向き採血データ解析、③肝生検で F3 と診断された症例の前向きデータ解析をそれぞれ行ったが、経時的増加が観察可能だったのはコホート②の C 型肝炎症例で APRI 0.09/year、FIB-4 0.29/year、コホート③の C 型肝炎未治療例で APRI 0.14/year、FIB-4 0.40/year のみであった。本年は約 7 年のインターバルを置いて 2 回 ELF score を測定した症例で、ELF score の経時的な変動を検討した。B 型肝炎症例、C 型肝炎症例いずれでも肝生検組織診断との相関関係は認められたが、経時的には ELF score が減少する傾向を認めた。

### A. 研究目的

ウイルス肝炎（B 型肝炎、C 型肝炎）は肝硬変や肝がんへと進行し、致命的となる疾患である。B 型肝炎は現代の医療でも体内から完全に排除することはできず、C 型肝炎はウイルス排除可能となっているものの、自分が感染していることに気づいていない患者、感染を知っていても医療機関を受診していない患者は多く、病態の把握および疾患の進展の様子を知ることが大事なことである。中でも肝硬変から肝がんが発症しやすいため、肝硬変に至る期間を検証することは重要である。しかし現在のところ肝硬変の診断は様々な臨床データから総合的に判定され、単一で診断可能な確立した指標はない。また慢性肝炎から肝硬変への進展を測る臨床指標として確立した指標も明らかではない。そこで 2 つの研究で肝硬変進展への実態を明らかとすることとした。

- ① 我々は以前の研究で、侵襲性の少ない血算・生化学的データを

用いて評価する APRI および FIB-4 について、肝生検診断との整合性および、(1) 2 回肝生検症例の生検間隔期間、(2) 肝生検で肝硬変と診断された症例の後ろ向き採血データ解析、(3) 肝生検で F3 と診断された症例の前向きデータ解析の 3 コホートで、病態進展度の測定を行った。また、各組織で線維化マーカーとして知られるヒアルロン酸、P3NP、TIMP-1 を用いた計算で導かれる ELF score の有用性について検討した。

- ② 病態の進展を予測するマルコフモデルを用いて B 型慢性肝炎、C 型慢性肝炎症例における肝硬変への移行率を検討した。

### B. 研究方法

- ③ — (1) APRI、FIB-4  
世界保健機関 (world health organization)

がウイルス肝炎の線維化判定として推奨する APRI および FIB-4 を用いて、以下の 3 コホートを対象として検討を行った。コホート①: 二回以上肝生検を行い、1 回目“慢性肝炎”、2 回目“肝硬変”と診断した症例群を対象とし、2 回の肝生検間の間隔を検討した。

コホート②: 肝生検で肝硬変と診断された症例群を対象とし、APRI、FIB-4 で“significant fibrosis (F2 $\leq$ )”と判定された時期から“cirrhosis”判定または生検診断までの期間 (0.5 年単位) を検討した。

コホート③: 肝生検で F3 と診断された症例群を対象とし、“cirrhosis”判定までの期間 (0.5 年単位) を検討した。データは武蔵野赤十字病院、国際医療センター、金沢大学に加え、広島大学、久留米大学、熊本大学、山梨大学、大阪市立大学、兵庫医科大学、北海道大学より集積し、匿名化の上、網羅的に解析を行った。

#### ① — (2) ELF score

2012 年に ELF score を測定したウイルス性肝炎症例を対象に ELF score と間組織診断との相関性について検討、さらに再度 ELF score を測定できた症例について、その増加度を検討した。ELF score の計算式としては以下のものを用いた。

$$\text{ELF score} = 2.278 + 0.851 \ln(\text{HA}) + 0.751 \ln(\text{PIIINP}) + 0.394 \ln(\text{TIMP-1})$$

#### ② マルコフモデルによる解析

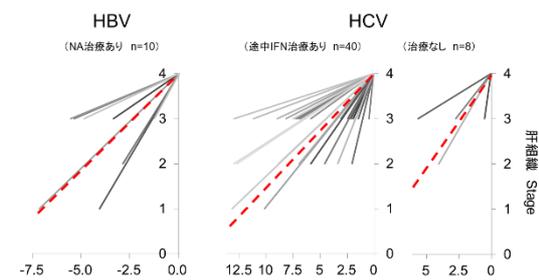
C 型慢性肝疾患, B 型慢性肝疾患と診断され, 2012 年 1 月~2021 年 5 月に観察された 1420 例, 1370 例のうち, 他の肝炎ウイルス共感染, 肝疾患, 観察時に肝癌を有する症例を除外し, 1 年以上の観察期間をもつ 619 例, 869 例それぞれを対象に検討を行った。肝病態については慢性肝炎, 代償性肝硬変, 非代償性肝硬変, 肝癌とし, FIB-4 の低値/高値の Cut Off としては肝硬変診断に基づく既報 (Itakura, et al.

2021) の 3.61 を用いた。期間別に Markov person-Year Unit を集計し, 病態間の推移確率を算出した。

### C. 研究結果

#### ④ — (1) APRI、FIB-4

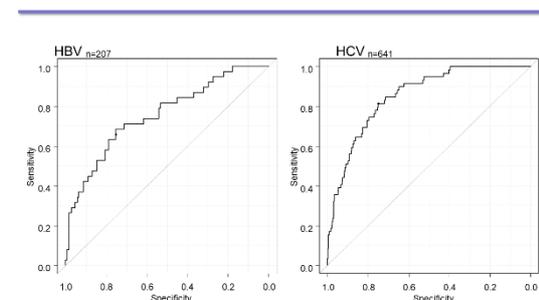
コホート①: B 型肝炎 10 例 (全例, 2 回肝生検間に抗ウイルス治療あり)、C 型肝炎 46 例 (2 回肝生検間に抗ウイルス治療あり不成功 40 例、治療なし 6 例) が検討可能であった。



2 回生検間の線維化進展率は B 型肝炎で 0.41 (0.18-1.2) stage/year、C 型肝炎治療あり群で 0.27 (0.08-2.7) stage/year、治療なし群で 0.43 (0.15-1.9) stage/year と計算されたが、個々の症例によるばらつきが大きかった。

**FIB-4 による肝硬変診断基準の検索:** FIB-4 では F3 以上に相当する advanced fibrosis についての基準値 (3.25) は世界的に consensus があるが、肝硬変である F4 についての診断基準値は一定の consensus はない。そのため、本研究の目的である肝硬変を診断する FIB-4 基準値を、武蔵野赤十字病院で肝生検を行った 848 例 (B 型肝炎 207 例、C 型肝炎 641 例) を用いて検討した。

FIB-4 index の F4 診断精度

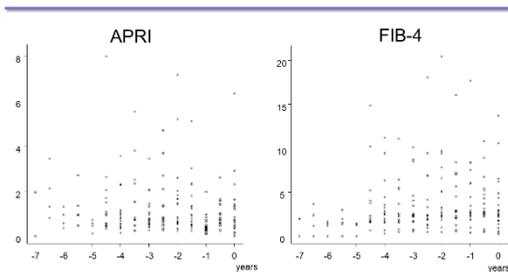


C 型肝炎では AUROC 0.85 と精度は高く、診断特異度 80% とした場合の正診率

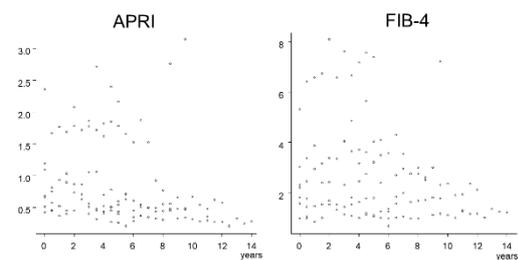
は76%でcut off値は4.23であった。一方B型肝炎ではAUROCは0.75と低く、診断特異度80%のcut off値も2.36とadvanced fibrosis基準を下回ったため、基準作成は困難であった。以下コホート②、コホート③ではB型肝炎では肝硬変診断FIB-4基準は設けず、C型肝炎では2.36を用いて検討を行った。

コホート②：B型肝炎26例、C型肝炎134例が検討可能だった。

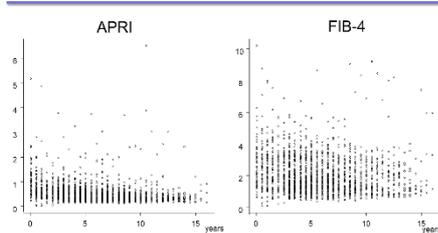
B型肝炎・肝硬変 (n=26)



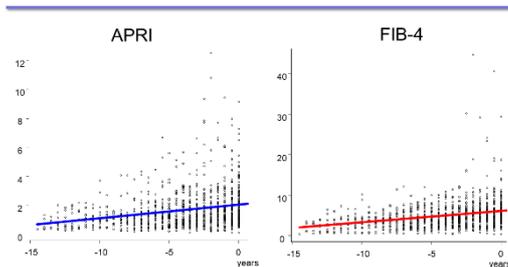
B型肝炎・肝硬変：治療なし (n=9)



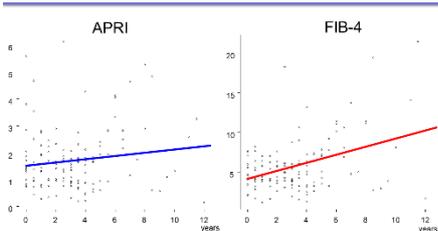
B型肝炎・肝硬変：治療あり (n=138)



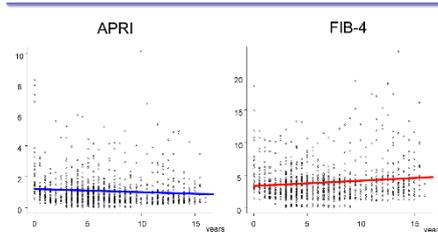
C型肝炎・肝硬変 (n=134)



C型肝炎・肝硬変：治療なし (n=28)



C型肝炎・肝硬変：治療あり (n=159)



B型肝炎症例群では一定の傾向を認めなかったが、C型肝炎症例群における年率変化値はAPRI=0.09/year、FIB-4=0.29/yearであった。

コホート③：B型肝炎145例（検討期間中治療あり136例、治療なし9例）、C型肝炎187例（検討期間中治療あり159例、治療なし28例）が検討可能であった。

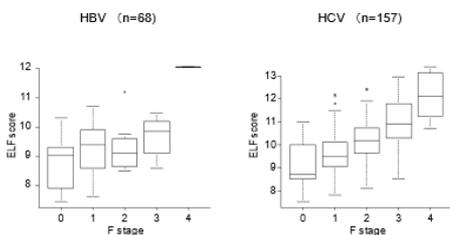
B型肝炎では治療の有無にかかわらずAPRI、FIB-4とも明らかな傾向を認めなかった。C型肝炎における年増加速度は治療なし症例群APRI 0.14/year、FIB-4 0.40/year、治療あり症例群APRI -0.083/year、FIB-4 0.12/yearであった。

### ① — (2) ELF score

B型肝炎68例、C型肝炎157例で肝生検組織診断との相関性を検討可能であった。B型肝炎、C型肝炎とも相関性を確

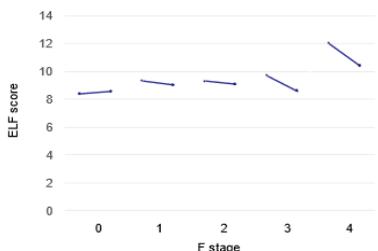
認 で き た 。

ELF scoreと組織学的線維化評価の相関性



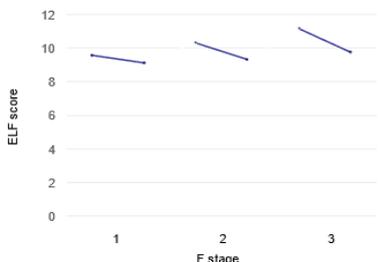
B型肝炎 31 例で ELF score の再測定が可能であった。8 例は核酸アナログ製剤などの治療は行っていないが、23 例は核酸アナログ製剤による治療を開始していた。F1 以上の組織診断症例は、ELF score 平均値は 1 回目より 2 回目のほうが低値であった。

ELF 値の変化 : B型肝炎



C型肝炎では 20 例で ELF score の経時の変化を検討可能であったが、で ELF score 平均値は 1 回目測定時より 2 回目測定時のほうが低かった。1 回目測定後、全例ウイルス排除を達成していた。

ELF 値の変化 : C型肝炎 (全例SVR)

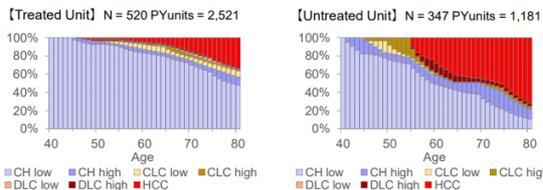


硬変は 42 例(6.8%),Fib-4 高値は 208 例 (33.6%) であった。

マルコフモデルにて 40 歳慢性肝炎を起点とした場合の 40 年病態推移は全 Unit では慢性肝炎 28.5%,代償性肝硬変 7.32%,非代償性肝硬変 3.95%,肝癌 60.22%であった。C 型肝炎治療ありなしで分けると治療なし Unit では慢性肝炎 23.56%,代償性肝硬変 3.35%,非代償性肝硬変 3.53%,肝癌 69.56%,治療あり Unit では慢性肝炎 43.88%,代償性肝硬変 8.64%,非代償性肝硬変 3.32%,肝癌 44.17%であった。

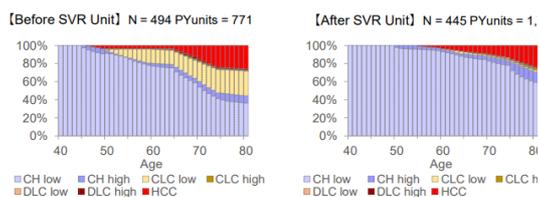
40 歳 Fib-4 低値を起点とした場合の 40 年 Fib-4 高値への推移については全 Unit では高値 35.69%,肝炎治療なし Unit では 66.27%,治療あり Unit では 18.90%であった。

さらに 40 歳慢性肝炎かつ FIB-4 低値を起点とした場合の 40 年推移の検討では治療なし Unit では慢性肝炎/低値 10.83%,慢性肝炎/高値 10.86%,代償性肝硬変/低値 0.35%,代償性肝硬変/高値 2.64%,非代償性肝硬変/低値 0%,非代償性肝硬変/高値 3.21%,肝癌 72.11%であったのに対し、治療あり Unit では慢性肝炎/低値 47.83%,慢性肝炎/高値 9.21%,代償性肝硬変/低値 6.69%,代償性肝硬変/高値 1.32%,非代償性肝硬変/低値 0.70%,非代償性肝硬変/高値 0.99%,肝癌 33.27%であった。



②マルコフモデルによる解析

C 型慢性肝疾患において、観察開始時、肝



一方、B型慢性肝疾患では観察開始時、肝炎治療なし Unit では肝硬変は 5 例 (1.0%), Fib-4 高値は 84 例 (16.0%)、肝炎治療あり Unit では肝硬変は 21 例 (5.2%), Fib-4 高値は 113 例 (27.8%) であり、治療あり Unit に肝硬変、高値群が有意に多く含まれている背景であったため、治療介入の背景の差を示す結果となり正確な評価が困難であった。

#### D. 考察

APRI、FIB-4 の年増加速度は C 型肝炎群ではコホート②およびコホート③の治療なし症例群で測定可能であった。コホート②では APRI 1.0(F2 以上基準)から 2.0(F4 基準)まで 10.8 年、FIB-4 1.45 (F2 以下基準) から 4.23 (MRCH 肝硬変基準) まで 9.6 年と計算される。またコホート③では 5 年後に肝硬変相当 (APRI 2.0、FIB4 4.23) になる基準値はそれぞれ、APRI 1.3、FIB-4 2.23 となる。コホート②と③で年増加率が異なっており、いずれも③の方が高くなっているが、これはコホート②が後ろ向き解析であるため、肝硬変になってしばらくたってから生検で確認できた症例が存在するためと考える。C型肝炎コホート③の治療例ではウイルス排除したかどうかは不明であるが、治療に伴い肝炎の鎮静化が得られた可能性があり、APRI・FIB-4 とも有意な変動を得られなかった可能性がある。

APRI・FIB-4 とも AST、ALT 値、血小板値に依存している。B型肝炎では自然

推移による肝炎活動性の変化により、同一症例でも AST、ALT 値には経時的変動に大きな幅があり、また血小板値も C 型肝炎ほど線維化の進展と逆相関しないため、APRI・FIB-4 とも一定の傾向を認めることができなかったと推察する。今後は症例数を増やして検討するとともに、より線維化に特化した指標や画像的な線維化診断法の検討も必要と考える。

今回の ELF score の経時的経過追跡については B型肝炎、C型肝炎症例ともむしろ低下傾向を示した。ほとんどが 2 回の測定間に治療を受けており、特に C型肝炎ではウイルス排除が得られており、肝炎の進行が抑えられている可能性が高い。今後 C型肝炎で治療を行わない症例のデータを集積解析する必要がある。B型肝炎未治療例でも大多数で ELF score は低下したが、まだ少数例であり、C型肝炎同様に症例の集積が必要である。

一方で、C型肝炎慢性肝疾患におけるマルコフモデルによる肝病態、FIB-4 による推移解析では肝炎治療により、肝線維化進行、肝病態進行、肝発癌が抑制されることが示された。さらに肝病態および FIB-4 を組み合わせた検討では慢性肝炎 > 代償性肝硬変 > 非代償性肝硬変の順に治療による肝線維化抑制へのインパクトがあることが示唆された。

#### E. 結論

慢性肝炎から肝硬変への推移の指標として、APRI、FIB-4 の妥当性について 3 種類のコホートを用いて検討した。C型肝炎では有用性が示唆されたが、B型肝炎では FIB-4 肝硬変診断基準値の策定も困難であるため、別法や組み合わせなどの工夫が必要と考えられる。今後は C型肝炎に焦点を絞って、FIB-4 による「肝硬変相当値」を算出し、多施設で検証する。その「FIB-4 肝硬変相当値」への推移率を

Markov モデルから検証する。また新規肝線維化進展マーカーとして ELF score による評価を行う。

F.健康危険情報  
特になし

G.研究発表(本研究に関わるもの)

1. 論文発表

※APRI、FIB-4 に関する内容を論文化した。

Itakura J, Kurosaki M, Setoyama H, Simakami T, Oza N, Korenaga M, Tanaka M, Torimura T, Sakamoto N, Enomoto N, Ueno Y, Kawada N, Kaneko S, Nishiguchi S, Chayama K, Tanaka J,

Izumi N, Kanto T. Applicability of APRI and FIB-4 as a transition indicator of liver fibrosis in patients with chronic viral hepatitis. J Gastroenterol. 2021 May;56(5):470-478.doi:10.1007/s00535-021-01782-3.

2. 学会発表  
なし

H.知的財産権の出願・登録状況

1. 特許取得 なし
2. 実用新案登録 なし
3. その他